

# 人 として

## 命への讃歌を描く

日本画家

山内若菜 さん

「楽園の予感」——アトリエの壁一面、吹き抜けの天井から吊るされた大きな絵には、海上の空に広がる紫色の暗い戦雲、その裂け目の光に向かっていく与那国馬に乗った少女が描かれています。与那国島の多様性あふれる生き物たち、福島で被曝した馬の親子…壮大な自然と命の輝きが迫ってきます。

### 被曝した牧場を描く

福島、広島、長崎などを題材に傷つけられた命をみつめ、制作を続けてきた日本画家の山内さん。2011年に起きた東京電力福島第一原発の事故をきっかけに福島の牧場に通い始めました。「事故が起きた当時、会社で社畜のように酷使され働かなければ価値がないかのような自分と、被曝を理由に商品価値がないと殺されていく福島の家畜。自分と動物たちを重ね合わせるように、無我夢中で牧場に通いました」被曝した牧場を描いた作品を各地で展示し、昨夏には原発事故の災禍を伝える福島県南相馬市「おれたちの伝承館」の天井画「命煌めき」が完成しました。

### 沖縄を戦場にさせない絵

昨年、映画監督・三上智恵さんの沖縄取材に同行し、「楽園の予感」を発表。制作は今も続きます。巨大な和紙のキャンバスに絵の具や墨をたらしこむ作業を繰り返すと乾いた表面に無数のしわができ、画面には亀裂や穴



が生まれます。そこから光が差し込みました。どれだけ抵抗しても要塞化が進み、あまりにも希望が見えない沖縄の現状を肌で感じるなかで、「道理の合わないやり方でせめてくる権力側に対して『そんなもんじゃ、やられない』『私たちは希望の行き先をわかっている』と暗闇の切れ目から出る光を必ず掴み取るような強い絵にしたかった」と語ります。

「絵は、私とともに常に変化して生きています。美術館に飾られるような仰々しい絵じゃなくて、抵抗の現場で声を上げながらみんなで掲げる、そういう絵にしたい。傷つきながら一緒に活動して、運動の中で見てもらって、みんなの意見でまた変わっていく。こんな社会に負けたくない、光をつくりだそうとするその心が世界を変えるんだというメッセージのある絵にしたいと思っています」

### 「過去と現在、そして未来へ —山内若菜 広島展」

2024年3月20日（水・祝）～3月25日（月）

（広島市中区・旧日本銀行広島支店）

### 「山内若菜 予感展 —神々の草原・讃歌樹木—」

2024年5月18日（土）～5月26日（日）

（横浜市・鶴見サルビアホール）

やまうち わかな／神奈川県生まれ。2013年から福島、岩手でのフィールドワークを重ね、福島の母や牧場を描いた展示を各地で開催。2021年、原爆の凶丸木美術館「はじまりのはじまり 山内若菜展」。2021年、第八回東山魁夷日経日本画大賞入賞。2022年、平塚市美術館常設展特別出品。